

開催地名：北海道留萌市	
開催日時	令和2年10月27日（火） 10：30 ～ 12：00
開催場所	港西コミュニティセンター
語り部	太田 千尋 （宮城県仙台市）
参加者	地域住民（町内会）、市役所・消防職員、道職員 54名
開催経緯	<p>留萌市は、北海道日本海北西沖地震や内陸部型地震による被害が想定されており、道から示された津波浸水想定を基に、現在、津波避難計画を改訂中である。自主防災組織の設置率向上や、その活動の活性化については喫緊の課題であると考えているが、市の大きな災害発生状況は、昭和63年の水害以外、大きな災害がほとんどなく、少子高齢化や町内会活動などの停滞化により、市民の防災に対する意識も低調な状況にあることを強く危惧している。</p> <p>この様な状況の中、東日本大震災の語り部からお話を伺い、関係者や市民の意識の向上を図りたい。</p>
内容	<p>（1）3.11 東日本大震災</p> <p>私は震災発生当時、仙台市消防局消防司令としてこの情景を目の当たりにした。仙台市内では宮城野区が震度6強、青葉区、若林区、泉区が震度6弱、太白区が震度5強であった。この地震により、宮城県でも太平洋沿岸に大きな津波が押し寄せた。震災前には、仙台市内での津波は50センチ程度と想定されていたので、最初はヘリコプターからの映像を見ることができずに音声のみで「街が流される」という状況が伝えられたため、状況をイメージすることができなかった。地震後は仙台市中心部でも帰宅困難者が発生し、避難所が開設された。皆さんご存知のように、生活用品はあらゆるものが不足し、車の燃料も長期間不足した状態だった。</p> <p>（2）避難所で浮かび上がった問題点とその対策</p> <p>避難所では大勢の方々が身を寄せるので、着替えをする場所がなかったり、女性用の物干し場がないことから下着が干せなかったり、生理用品やおむつ、粉ミルクの不足や配布方法に問題が発生するなど、様々な問題が発生した。これらは、自主防災組織の中に女性リーダーが配置されていれば改善されるケースが多いので、今後の防災対策においては女性の視点を取り入れること、女性の参画等を推進することが重要だ。</p> <p>仙台市では、避難所の運営は、その地区の自治会長たちで作った避難所の運営委員会で行っていた。そしてその運営委員会の中で、分野別に班を構成し、住民主体の役割分担をしていた。ボランティアについては、いろいろな方に来ていただいた。ボランティアについて希望を言わせていただければ、本当は技術を持つ</p>

た人に来ていただきたい。学生さんとか若い方々が多いのだが、とりあえず現地に行けば手伝いができるだろうと考えている人がたくさんいる。ところが、来られても避難所に泊めるわけにはいかないため、泊まる所を確保するという業務が発生し、市の職員は大変な思いをしたという事実もある。

また、避難所を開設しているということは、その周辺の住宅から避難されているということなので、不在となっているお宅があちこちにあるということで、ボランティアを装った窃盗グループには注意する必要がある。

(3) 防災・減災対策

津波では生きるか亡くなるかの二択しかない。万一に備え、自宅周辺の災害リスクや避難場所、避難ルート、待ち合わせ場所等を家族で共有しておくことは極めて大切である。こうした準備をしっかりとっておかないと、発災時のパニックになってしまう状況では落ち着いた行動ができない。

行政には平等の原則があり、切迫した状況での臨機応変な対応は期待できない。そのため、自分たちで何とかして助け合うのが最良であり、地域の防災力は、コミュニティで高めることが必須である。そして訓練で成功しないことは本番で成功しない。町内会をはじめとする自主防災組織の設置や日頃の訓練を是非進めていただきたい。



開催地より

防災ヘリからの映像や音声を使って、東日本大震災の緊迫した状況をわかりやすくお話いただいた。自主防災組織の活性化（防災への取組、地区防災訓練、共助への取組）を進めるとともに、地震、津波避難対策及び避難所運営への取組を進めていきたいと思う。